４．①イエスキリストについて（その１）

神は人をご自身のかたちとして創造された。　創世記　1章27節

イエスさまについて学びます。

イエスさまについて学ぶことは人の①堕落と②回復です。今回は①について話します。

神は人を「神のかたち」に造りました（１章２７節）。人は誰でも悪魔ならぬ神のように造られました。神よりすばらしい方はいません。その神のように、最高に価値あるかけがえのない存在として造られたことは何よりもすばらしいことです。それほど人は神に愛され、望まれて、造られました。被造物の中で人だけが「神のかたち」に造られ、神の息を吹き入れられ、息の合った神のパートナーとして被造物を管理する、神の働きを委ねられます。人は「被造物の冠」と呼ばれます。

それでは、「神のかたち」とは何を意味するのでしょうか。人が他の被造物と違う点は何でしょうか。人は亀や豚とは何が違うのでしょうか。それは、人には「人格」があるということです。この場合の「人格」とは、「知性、感性、意思」のことです。人にはスマホを発明したり、

善悪を判断する「知性」があります。そして、美しさに感動してそれを表現する「感性」があります。さらには、やるべきことをやり遂げる「意思」があります。これらは亀や豚にはありません。豚にはスマホを作る「知性」も、芸術を生む「感性」も、根性ある「意思」もありません。これらは特別に神が人に与えたもので、最初の人間はこれら三つをフル稼働させて神の働きを行いました。つまり、何が神に喜ばれることかを「知性」で考え、それを行うことを「感性」で喜び、困難があっても「意思」を働かせて根性で全うします。こうして、「神のかたち」に造られた最初の人間は、「人格」的に神に応えます。自分の全人格を挙げて、神のことばに従ったのです。

それで、「エデンの園にあるどの木からでもその実を取って食べてよい」と神に許可されると、喜んで食べました。一方で、園の中央にある二つの木のうち「『善悪の知識の木の実』は食べるな」と言われると、「知性」はそう理解し、「感性」は食べないことを喜んで、あくまで食べないと「意思」しました。全人格を挙げて、神のことばに従ったのです。

でも、悪魔がこれを惑わします。悪魔は巧妙に「食べてはならない」と命じられていた「善悪の知識の実」を食べるよう誘惑します。「これを食べると神のようになる」と惑わしたのです。悪魔にそう言われてあらためてその実を見てみると、「見た目も良く、おいしそうに」見えます。どうしてでしょうか。食べると「神のようになる」からです。それで、思わず食べてしまいます。でも、食べて「神のようになった」のかといえば、そうではありません。食べた瞬間、「や

った、これで神になった」と喜んだでしょうが、下を見ると下半身丸出しです。それで、思わず「恥ずかしい」と下半身をイチジクの葉で隠します。しかも、その後はエデンの園を追い出されて死ぬようになります。「これを食べると必ず死ぬ」と言われた神のことばの通りに、人は死にます。結局、「これを食べても死なない」「これを食べると神のようになる」と言った悪魔のことばは実はすべて嘘だったのです。人を死と地獄へ道連れにしようとする、悪魔の誘惑でした。

悪魔に惑わされる前には、人は神のことばを中心に生きていました。知性、感情、意思を挙げて神のことばに応えます。「これを食べてはならない」と神に命じられると、そう理解し、食べないことを喜び、絶対食べないと意思して、全人格挙げて神のことばに従いました。でも、悪魔に「食べても死なない」と嘘を吹き込まれると、揺らぎます。「これを食べると神のようになる」と言われると、実がおいしそうに見えます。そして、この時初めて人は自分を基準に判断するのです。神に喜ばれるかどうかではなく、自分が美味しいかです。神のことばに従うことが人の生きる基準のすべてでしたが、一変します。神の前にどうかではなく、自分の目にどうか、美味しいか美味しくないか、自分に得か得でないか、それがすべてです。すべては自分のためです。「知性、感情、意思」という全人格を総動員して自分の欲を追求します。

こうして人は神に背きます。神を中心に生きることを捨てて、自分中心に生きるようになります。全被造物が神に従い、すべてが神を中心に動く中で、人だけが神の言うことを聞かず、

自分中心で勝手に生きています。それはまるで一人の「神」のようです。神のように「自律」します。こうした人間の「自律」を聖書では「堕落」「罪」「原罪」と呼びます。このように、「罪」とは神からの「自律」のことで、それは神からの「離反」、さらには神への「反逆」を意味します。「罪」とは神に反旗を翻して神に反逆することなのです。このように、罪とは神に対するものです。殺人や姦淫、盗みや嘘つきといった、人に対するものは、人が神に「罪」を犯した罰として神が引き渡す、「汚れ」と言うべきものです（ローマ１章２４節から）。

神に背く「罪」の故に、人は悪しか行えなくなります。表面的には善に見えても、その本質は神のためでなく、自分のためであって、本質がずれているからです。この本性の堕落を「全的堕落」と言います。カルヴァンはこう解説します。

「人間の精神は完全に神の義から背き去っているので、そこでは不敬虔な、ねじけた、醜悪な、不純な、破廉恥なこと以外、何一つ考え、願い、企てることができないほどである。彼の心には罪の毒が全くしみ込んでいて、腐敗の悪臭の他には何一つ発散することができない。また、たとい人によっては時に善の外面を示すことがあるとしても、しかし、その精神はいつも偽善と虚偽との歪曲のもとに包まれ、内なるよこしまによって、その魂は絡みつかれたままなのである。」

それで、たとえ人の賞賛を博する善行や「美徳」があったとしても、だからといって「天上の法廷に於いては『義の判決』を受ける何らの価値も持たない」のです。私は22歳でカルヴァ

ンの『キリスト教綱要』のこのことばを読んで、自分が罪人だと生まれて初めて分かりました。人目は欺けても神の目は欺けません。どんなに人からほめられても、神の前に罪しかなければ、永遠に見捨てられるしかありません。神の前に「義」かどうか、それが人にとってすべてなのです。義なら神に受け入れられますが、罪なら見捨てられます。そして、人は罪を犯した罰としてエデンを追放されて死ぬようになります。死は神のさばきなのです。しかもエデンに入れない、つまり天国に入れません。無理に入ろうとすると、「炎の剣」でズタズタに切られて永遠に焼かれます。「義」がないのでそうなります。罪人は皆そうなるのです。全人類は何一つ神に従えず、罪しか犯せないのですから、その罪人がどのようにして神のさばきを逃れることができるのでしょうか。

ここにイエスさまが来られた目的があります。神は罪人を見捨てることなく、イエスさまを遣わします。イエスさまは第二のアダムとして人となります。神に逆らう罪人の身代わりとなって、神に従う義人の生涯を歩み、私たちの罪を引き受けて神にさばかれ、ご自身の義を私たちのものとなさいます。これにより、私たちが神のさばきを免れるのみならず、「神のかたち」を私たちに回復なさいます。喜んで神に従う「キリストの人格」を私たちに再生してくださるのです。